
LINGERING SCENT

空知新名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LINGERING SCENT

【著者名】

N8291A

【作者名】

空知新名

【あらすじ】

忘れようと努力しているのに好き

Hの後、彼がいそと背中を向けて下着を身につける姿を体をベッドに預けて眺める。

男の人のそんな姿を見ると、すこく愛が冷める。

なんか出すもの出して終わらせたって感じといつのが伝わってくるし、なんとも情けない姿に見えてくる。

それ以前に彼は私を愛してなんていなければ。

偽愛で虚しさを抱き合つてつめる関係。

もじもじしながら下着を付けると彼がおいでと私の腕を引っ張つて近くに引きよす。

『腕枕疲れちゃうよ? いいよ。』

『いいの。俺がくつつきたいから』

Hする時にしか愛がないはずなのに、彼は優しい人だと思う。

本当の君はどんな人なの?

何を考え、私を見ていながら誰を愛してるの?

私は君が好きなのに。

彼の腕にしがみつくと彼は男の人とは思えないぐらい甘い香がした。

彼の車もそりだ。

すくなく心地良い。

香水とか車の芳香剤の匂いとかではない。

そういうものの匂いは私自身苦手で異常に悪くなってしまつからだ。

『良い匂いするね』

クスリと笑い猫のように甘えながら私が言った。

『亜美も同じ匂いがするよ。てかシャンプー、パンテーンでしょ?』

身を少し起にして私の顔を覗き込んで目を輝かして聞いてきた。

『うん、ヴィダル使ってる』

『なんだー。でも亜美も良い匂いするよー。』

お互にクスクス笑いながら布団の中で抱き合っていたら彼は眠りについてしまった。

こんな関係いつまで続けるんだろう?

彼は私を思ってくれてはいるけど、私を通して誰か他の人を強く思つてゐる。

こんな事が長く続くと悲しくなってきて涙もでなくなってしまった。

彼の寝顔をじっと見つめる。

高い鼻、長いまつげ、額、頬。

どれもきれいで整っていて見とれてしまう。

華奢に見えるけど実際肩幅も広いし、手だってこんなに大きい。

けれど私よりも年上なので、子供っぽくて甘えてくる事が多い。

それを不快とは思わない。

むしろ可愛いく思う。

彼の顔を見ていたら、すこく田の前の彼が愛しくなって顔に近づいて触れてみた。

『んっ…』めん。寝起きった

彼を起こしてしまった。

『じめん。きれいな顔だなーと思つてべた触つちやつた

『亞美は鼻低いし童顔だもんなー。まだ中学生に見えるもん。』

やつぱり彼は私にキスをした。

『私もまた帰らなあや。明日も仕事あるし。』

夢から覚める。

『泊まつてけばば？朝送るよ。』

それ以上優しくしないで。

『着替えもないし、今日まじめんね』

『今日はいつも泊まつていかないじやん』

帰りの車内は無言だった。

彼の優しさが時々ものすごく辛くなる。

普通に付き合つて彼の彼女なら嬉しいだらうけど、所詮あたしは本当に愛されていないもの。

私の好きが止まらなくなつてしまつ。

優しくされて辛い夜はよく一緒に居ない」とする。

私も割り切る事が出来ればいいけど、そんな器用な女じゃない。

男の人は器用だ。

家の前で車が止まつた。

『今度はいつ会えるの?』

子犬のような切ない顔で彼が問い合わせる。

この人はこいついう事して……確信犯ならかなり質が悪い……

『また予定が解つたら連絡するね』

『……うん』

不安そうな彼の顔を見送つた。

ソファに身を沈める。

ぼーっと彼との出会いを振り替える。

『あの、すみません』

『？、何か？』

『リルケ、好きなんですか？』

市立図書館の司書の私は当時リルケを良く読んでいた。

『…ええ』

私は愛想よくこいつりと微笑んだ。

『俺もリルケ好きでよく読むんですよ。なんていうか生きてる事の不安とか心細さが解るつていうか、自分の中の影と光…みたいな』

私と彼はすぐに打ち解けていった。

彼を好きだと思った。

抱かれても嫌じやないと思つた。

けれど彼は愛してるとは言つてくれるけど、私を見てはくれなかつた。

私は彼にとつてなんなんだつ。

理由が解るのはそんなに長くはなかつた。

彼の部屋の一枚の封筒。

中には9号の指輪と手紙と一枚の写真。

手紙の内容は彼の彼女が亡くなつたという事。

唯一の形見の指輪の事。

写真に写る彼女は華奢で可愛らしい人だつた。

見て私は心の中のドロツとした感情が増殖した。

封筒ごと全て捨ててしまつた。

彼は私が帰つた後気付き、探していた。

「何置場を探しながら泣いていた。

なぜ君は私を観てくれないの？

私はあの人には叶わないの？

いつのまにか眠ってしまった。

嫌な夢……。

彼の心はあの人には縛り付けられてる。

なぜ彼をこんなにも苦しめるの？

わたしなら彼を幸せにできるの！

あの人さえ居なければ良かつたのに。

けどもうこれで終わり。

このままじゃ私も彼もダメになってしまいます。

『引き際…なのかな…』

一言ため息混じりにつぶやいて彼に電話を書けた

あれから彼とは会つていません。

毎日仕事に明け暮れています。

今度違う町の図書館に配属されたので、これを期に引っ越ししようとおもっています。

毎日忙しくで追われています。

けどふとした時、彼の香を思い出します。

そんな時涙かとまらないくなる。

きっと私も彼のように彼に心を締め付けられ続けるでしょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8291a/>

LINGERING SCENT

2010年10月11日14時48分発行